

第6回日本赤十字看護学会学術集会 テーマセッションV

地域とともにある看護

The Nursing Education and Nursing Activities by Collaboration with Local Resident

司 会	松尾 和枝	MATSUO Kazue	(日本赤十字九州国際看護大学)
話題提供者	谷岸 悦子	TANIGISHI Etsuko	(日本赤十字九州国際看護大学)
	蒲池 千草	KAMACHI Chigusa	(日本赤十字九州国際看護大学)
	豊福真由美	TOYOHUKU Mayumi	(宗像市保健師日本赤十字九州国際看護大学研修生)
指定発言者	三好 典嗣	MIYOSHI Noritsugu	(宗像市派遣職員日本赤十字九州国際看護大学在籍)
	棚町 博之	TANAMACHI Hiroyuki	(宗像市自由ヶ丘地区健康福祉部会長)
	田形 殖	TAGATA Shigeshi	(宗像市赤間西地区健康福祉部会長)



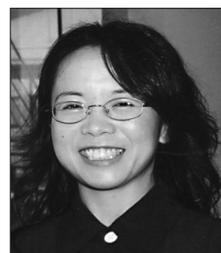
松尾 和枝
MATSUO Kazue



谷岸 悦子
TANIGISHI Etsuko



蒲池 千草
KAMACHI Chigusa



豊福 真由美
TOYOHUKU Mayumi

大学改革の方向性として、文部科学省高等教育課は、大学が知的文化拠点として、地域の専門人材育成や生涯学習推進の役割を担い、産学官民の連携を深めることや、その過程の中で大学の地域への貢献をより強化するように指導している。

本学では、開学当初より地域に開かれた大学をモットーに、大学内の各施設の利用を市民に開放している。学生の教育・実習においても、地域住民の協力は不可欠である。その他、学生のクラブ活動はもとより、教職員の地域活動も年々増加し

松尾和枝
てきている。また、行政との人事交流もあり、市から大学に派遣や研修で配置された職員4名が、行政や住民のニーズと、大学のニーズのコーディネートを行なうなかで、今年で5年目ながら、大学と地域との相互協力体制は整備されつつある。

本学での地域活動の実践を紹介する中で、地域で看護を学ぶ教育的意義、また日本赤十字の看護大学としての地域貢献のあり方について、参加者と共に協議したい。

教育や地域活動の現状と教育的意義 — 実習や大学教員・学生の地域活動 —

谷岸悦子

基礎看護学を担当する立場から「基礎看護学実習Ⅰとして地域での実習」について、大学の地域交流委員の立場から「大学と地域の交流、学生の活動」について紹介したい。

1年次に地域で実施している基礎看護学実習(特)は、大学開学時から行っている。それには2つの背景がある。1つには、本学が大学教育の中で看護師・保健師の両方の国家試験受験資格を目指していることから、看護・保健の両方の視点から対象を理解させたいということである。もう1つは、在宅療養のニーズが高い現在の高齢社会のなかで、病院・施設内看護に偏りがちであった従来の看護教育では、十分に対応できないと考えたからである。

その学習のねらいは、1つには人間の基本である「生活」という場がどのようなものであるかを理解し、生活者としての個人を理解することである。実際に家庭訪問をして、生活している日常生活の場を見、その場で対象に接することは、個人の生活や、生活者としての対象者を理解し、対象の生活感覚の中で人を理解する能力を育てることができると考えている。2つ目は、「対話」である。看護の学習がスタートした間もない時期に、看護の最もベースになる対話の重要性と難しさを、実践的に学ばせ、その中で、看護の基本となる生活、環境、健康がどのように関連しているかを考えることである。

実習開始前には、地区環境の理解のために、地区特性の情報を提示している。その後、学生2人一組で家庭訪問をさせている。訪問は、初年度は3日間、2年目からは1日2時間を2日間、終日、対象者とともに行動をさせていただくように要望している。その中で、対象と日常の生活場面を共感しながら、生活の満足感、楽しみ、健康で気をつけていることなどの話を聞かせてもらっている。訪問後、学内で10~12名のグループ活動を

行い、教員を交えたディスカッションの中で、訪問時の住民の発言を振り返りながら、対象の理解、日常生活の理解、コミュニケーションのあり方を検討している。

実習を通して、学生は、「人を理解することか」また「理解することの大切さ」を学ぶとともに、「人生の先輩からのメッセージ」については、これからの看護や、自分自身の人生の課題として受け止めているようである。一方、実習に協力いただいた対象者は、「対話する機会がもてた満足」、「健康への意識の高まり」「若者に対するイメージのプラスへの変化」などの評価であった。

学生は地域での実習を終えると、対象者との関係を通して、看護学生としての立場を自覚し、そこに責任感や役割意識や使命感などが目覚め、発言や言動に、成長を感じ、頼もしくなってくる。

次に、大学の地域交流委員の立場から大学の地域活動について紹介したい。本学の地域活動は、大学の特徴である「看護学」・「赤十字」・「国際活動」を生かした様々な活動を行っている。公開講座の開催をはじめ、大学周辺の企業・研究所との共催で行う健康祭などでは、健康測定機器を利用した健康チェックや健康相談などを行っている。また、大学レストランの協力を得て600カロリーのヘルシー食の献立を用意するなど、食事について体験的に学習できる機会も提供している。学生も大学の地域活動や地域行事にボランティアとして参加したり、サークル活動の成果や授業で学んだ学習内容を地域住民に紹介している。

地域に開かれた大学とは、大学のみならず、大学周辺を含めて地域全体をキャンパスとして、地域住民と大学のお互いが学び合えることが大事なのではないかと考える。大きな地域キャンパスの中でお互いが学び合える場となるように連携協力のあり方を考えていくことが重要である。

地域住民から学ぶ看護学生 —地域看護学演習を通して—

蒲池千草

演習の背景と目的であるが、地域住民の健康ニーズは、社会環境の変化に伴って個人、家族及び地域、それぞれ様々に異なる。地域看護は物理的環境問題だけでなく、生活する人々の考え方、すなわち信念、価値観、人生観を把握し、住民の生活基盤に立って健康を支援していかなければならない。地域で働く保健師は住民の健康ニーズに適した生活環境を住民主体で方向性を見出すように、さらに、主役である住民が目標を達成できるように支援していく役割がある。本学では、学生が多様な健康レベルの住民に対応している保健師の役割を理解する目的で、3年次に地域看護学Ⅰ・Ⅱの授業で演習を組み込んでいる。この演習で学生は地区診断、保健課題の分析、健康教育の企画、実践など一連の保健師役割を体験できるが、その特徴は地域社会でのフィールド学習にある。

フィールド学習の特徴は、①地域看護学の対象である住民、行政や地区組織などの協力体制を得て実施している。そのためすべての発達段階、健康レベルを対象に学習できる。②学生は地区踏査や生活実態把握の為のインタビュー、生活習慣調

査などの実施を通じて住民主体の視点で健康生活のニーズを考える機会がもてる。③学生は健康問題分析の報告や健康教育を地域住民等に直接実施して保健活動や保健師役割を学習し、実施評価を受けることができる。④健康問題分析や健康教育に住民が参加し、適切な意見を提供している。⑤それらによって学生は住民主体の方向性を見出す学習ができる。

フィールド学習の効果について述べる。学生の学習効果の評価は、時間外の学習をすることが多かったがそれ以上の学びや貴重な体験になったととても高かった。

地域看護学の教育目的は地域住民の健康を考え、保健師の役割を学ぶことである。地域での健康政策のプライマリーヘルスケアやヘルスプロモーションは地域住民の参加が必須である事を示している。住民を主体とした看護活動の展開を学ぶには地域でのフィールド学習が必要である。看護学生の教育にとって地域住民とのパートナーシップは今後、ますます重要視される。

大学の地域貢献 —看護大学への期待と共同活動の必要性—

豊福真由美

宗像市は、平成17年に旧大島村を合併し、人口約9万4千人、保健師数13名の市である。宗像市は、市の保健行政の推進を重要課題とし、その役割の重要な担い手として保健師の資質向上を目指し、今年4月から大学へ保健師を派遣している。市では、平成16年度に「健康むなかた21」を策定し、10年計画で市民の健康増進活動を推進していく計画を立てているが、日赤看護大学には計画策定への協力のみならず、市民の健康づくり支援関係団体のひとつとしても大きく期待している。

大学の地域活動には、基礎看護学実習や地域看護学演習などの教育活動の一環としての関わりと、教職員による地域住民の健康増進活動の支援がある。特に地域看護学演習の「ライフステージ

毎の健康課題について地区診断をして健康教育を行う」という取り組みは、まさに保健師活動そのものである。地域住民等へのインタビュー結果は、保健師活動にも役立つ情報も多く、また、現在、保健師が十分介入できていない学童期・中高生期・青年期や産業保健の対象者への地域診断、健康教育活動は、市民の健康意識の向上に大いに役立つと思われる。

保健師活動にとって、地域住民や対象者の健康課題の把握や問題解決の方向性の検討において、住民や対象者の声を聞くことは重要なことではあるが、その基本的なことを行うことが容易でない。その不足部分を大学の教育活動がカバーし、活動内容を共有できることは価値がある。

この3ヶ月間、大学の地域演習へのかかわりを通して、より住民の身近な声を聞くことができた。その中で、市民が看護大学に期待する役割は、「教育や教員の実践活動をとおして地域の健康問題を掘り起こすと同時に、住民や行政とその健康問題を共有し、住民の問題解決にむけての保健活動のアドバイザーである」と理解した。それにより市民の健康づくり活動に大きな効果が期待できると考える。

地域での実習や演習に対する住民の参加は、年を重ねるごとに積極的建設的なものになってきた。また、提案された教育の課題や方法論の提示の内容に、保健師の仕事や地域内での健康サポーターとしての役割期待が明確であることを実感し

ている。また一方で、地域での学生の活動が住民の健康増進や生きがいに寄与しているとの評価も聞かれるようになってきた。行政の地域活動への参加も、住民の行政との連携のとり方も今まで以上のものへと変化しつつある。

行政、大学、住民のコラボレーションのあり方は、「健康増進」という共通のテーマをもち、互いに共通のフィールドである「地域キャンパス」の中で、その情報を共有することによって、さらにその中で「教育」という双方向の関係性の中で学習活動を継続しつづけることによって、互いの英知を出し合いことや、役割分担、協働感覚、守備範囲等々、よりよい関係性が築けて行くものと考ええる。

以下テーマセッションV内のコラム

行政・宗像市派遣職員の立場から

三好典嗣

市の行政職の派遣は、開学準備室発足時以来3人目になり、今年6月で最後になることはすでに決定している。市職員派遣の意味や意義、効果については、派遣以来ずっと自分の仕事の評価として考え続けてきた。

開学5年目を迎えた本学の実績の中には、大学教育への宗像市民の協力、大学教員・学生の市民活動への参加、大学と行政との各種連携協働事業等々、数々の活動や共同事業が展開されてきており、宗像市の中で看護大学は保健福祉医療の専門的拠点のひとつになりつつある。

本学におけるその貢献のあり方について、これまでの実績を振り返りながら考察してみたい。

看護学部が対象とする範囲は、胎児から高齢者までのありとあらゆる世代であり、健康状態も健康な人から病人や重傷者まで様々な状態に対応している。そのため住民や地方自治体の要望に対する受け皿は大きく、市民の幅広いニーズに裨益できるものがある。

リエゾンとは、大学と学外の世界を結ぶ「繋ぎ役」を意味し、主に産業界と大学との連携において使われ、近隣では九州大学が知的財産本部を設け、民間企業との共同研究や産業界への技術移転などの活動が推進されている。

看護大学でのリエゾンを考えてみると、その性質上、

産業界との連携はあまり考えられないが、看護の対象が「人」である事から、その対象は「地域住民」になるのではないかと考えた。

地域社会において、医療や保健、福祉といった専門分野の知的財産は必要不可欠であり、その必要性はこれからの超少子高齢化社会において益々高まっていくと思われる。行政職員の立場から見ると、看護教員は、住民の保健医療福祉のニーズに専門的に応じることができる人材の宝庫で、またその教員の研究課題には、地域住民の健康増進を支援しうるテーマを多く持っていることがわかった。また、その大学教職員の研究活動や教育活動の多くは、宗像市民が健康で生き生きと高齢化社会を過ごすための地域福祉のあり方や健康管理のあり方を模索している住民のニーズと合致していることもわかってきた。

このような看護大学のもつ知識や技術、研究課題や実践力と住民のニーズをコーディネートするリエゾン機関が創設されることを希望している。

地域社会における看護大学の担える役割とそのポテンシャルや看護学生の社会貢献への意欲や積極性は大きい。教員はもちろん、学生も含めた看護大学ならではの大学のマンパワーを活かし、今後さらなる地域社会への貢献を期待している。

宗像市民の立場から –初めての基礎看護学実習の受け入れ–

棚町博之

看護大学の開学後、コミュニティに基礎看護学実習の受け入れの依頼があった。実習期間は3日間というものだった。看護大学1年生の若い女性の家庭訪問をどのように受け止め、どんな話をしたらよいものか悩んだ。その結果、初日は、自分の人生における仕事の話、病気の経験談を延々と話した。2日目は、若い学生に説教でもしているのではないかと心配した娘が心配して訪ねてきた。初めての実習の受け入れは、娘の協力によって、どうにか活発で楽しいコミュニケーションをとることができた。緊張と不安の交錯する体験

であった。その後、実習を受け入れた学生からもらった手紙に、家庭訪問の経験は、看護に通じるものがあったとの手紙をもらい一安堵したものである。

地域に貢献するために大学として何をしたらよいか。この問いに対しては、時間の許せる範囲、地域の行事に参加して欲しいの一言に尽きる。地域の高齢者や身体障害者を集めた会食会で、日赤の学生のエイサーの演舞は、地域の高齢者に大変好評であった。学生達の若々しいエネルギーは、地域を活気付けるものである。

保健師学生への期待

田形 殖

宗像市の高齢化率は20%台であるが、行政区による格差は大きく、中には私の住む地区のように40%に達そうとする地区もある。そのような地域の環境をみると、道路から住宅まで階段を利用しなければならないような住居も多く、足腰が弱くなってくる高齢者にとっては、住みやすい環境であるとはいいがたい状況もある。このような環境の中で高齢者が、相互に助け合いながら住みやすい街づくりを考えていくことは、今後の地域づくり活動の最大の課題と思われる。自分たちの行政区では、「自分の体は自分で動かすことができるようにする」そのような高齢者の育成を目指した地域活動をヘルス推進員が中心になって「ダンベル体操」を行っている。参加者の中には、病院にいく回数が減少し、元気になったという声が聞かれている。このような現状を踏まえて、従来の保健師の行う、どこでも共通している一般論的な保健指導や健康教育に疑問を感じていた。行政に携わっている保健師には、こ

のような地域の環境や生活の実態を把握した上で、高齢者をいかにサポートするかを考えてほしいと感じている。

大学からの演習への協力依頼に対しては、このような思いを含めて、「保健師はいかにあるべきか」を考えていただきたいと思い、最大限の協力を行っている。障害者住宅用に建築した我が家も毎年、学生には見学してもらい、地域社会における療養看護の現状や課題についての理解に役立ててもらえればと考えている。

高齢者は、保健師の活躍に期待している。授業では体験できないような地域生活や住民の声を実際に体験してもらいながら、健常者である学生にとってはなんとも感じない環境が、身体機能が低下した高齢者では厳しい環境になっている。そのような状況を対象の声を聴き、その立場にたって理解し、保健活動を行う保健師になってくれることを切望し、演習の指導に協力している。

